

平成 22 年度 海外研修派遣 報告書

大阪大学医学部附属病院 川本 理沙

1. あなたがこの研修に求めたものとその結果

私がこの研修に参加しようと考えたのは、まずは最先端の技術を実際に五感で感じ、習得したかったからである。また、違う角度で放射線技師という職を見直すことで、自分が一体何に興味があるのかを見極めたかった。Molecular Imaging や Neuro 領域における High Field MRI といった少し臨床とは違った世界を垣間見ることができ、この研修は、私の診療放射線技師としての専門性を深めるような、よいきっかけになったと考えている。講師の先生方の lecture はとても素晴らしく、興味をひくものばかりであり、とてもよい経験であった。

2. 日本と米国との医療に関する違いについて

米国では、放射線診療と一概に言っても、研究と臨床とはしっかりとわけられており、日本の放射線技師よりも特に専門性を求められているようであった。技師の国家資格だけでなく、加えてモダリティごと(CT/MRI/放射線治療/マンモグラフィ等)のライセンスが設けられていると聞いて大変驚きを覚えた。このように日本と米国では考え方も放射線技師としてのあり方も違う部分が多いが、米国のよい部分をうまくとりいれて(すべてをコピーするのではない)、日本の医療がよりよい方向に向かっていけばいいと思う。

3. 最も印象に残ったこと

やはり 7T の MRI は圧巻であった。承諾書を書いたり、専用の検査着に着替えたりすることでさらに興奮させられた。変な気分にはなったが、magnet center まで往復できた。(青い検査着を着た同じような顔をした人々がマグネットの周りをゆーっくりと 1 周している様子はまるで何かの宗教儀式のようできっと気味悪かったでしょうね……) 今後 High Field MRI がどのように発展していくのか、どのように臨床に応用されるのか非常に楽しみである。

4. 研修で得たものを今後どのように生かすか

この研修では言葉では言い尽くせないほどの経験をさせてもらった。広い視野を持つということ・より深い専門性を持つことの大切さ・そして心に余裕を持つこと(Health & Beauty)などを学び、精一杯、体で吸収してきたつもりである。将来的には、この経験を持って、何らかのスペシャリストとして仕事を全うしていければいいと考えている。そして何らかの形で患者様に還元できたらよいと思う。また、この研修で得た「人と人とのつながり」を大切にしていきたい。1 週間という短い時間ではあったが同じ志を持つ人々と時間を共有できたことを誇りに思う。この輪がこれからもつながっていけるよう、後輩たちにぜひ広めていきたい。

最後になりましたが、このようなすばらしい研修の機会を作ってくださったスタンフォード大学関係者・日本放射線技術学会関係者・GEHC-J の皆様、また引率の九州大学病院の西川様、そして、快く送り出してくれた土・井技師長を始めとする大阪大学医学部附属病院医療技術部放射線部門の皆様に心より感謝いたします。

(写真) Michael Moseley 教授と最終日のクイズ大会で get
した Stanford 猿くんとともに(修了式の後)

